Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University. 2007, Vol.10, 131-136.

論　文

幼児期における人に向けた笑いの発達

恩田 真弓・松澤 正子

Development of the human-directed smile of toddlers

Mayumi ONDA, Masako MATSUZAWA

Developmental changes in the human-directed smile of toddlers were investigated. Children from 10 months to 3 years of age (n = 16) were observed in natural situations at a nursery school. Results indicated that younger children around one year of age smiled alone and at others, whereas most smiles of older children were directed at others. The other-directed smiles of younger children were often elicited by actions or smiles from others, whereas most smiles of older children occurred voluntarily to communicate with others. Two-year-olds frequently smiled directed at others and the smiles were accompanied by vocalizations. Three-year-olds did not vocalize when they smiled at others, but they often smiled while looking at the faces of others to empathize with them.

Key words : smile（笑い）, development（発達）, social behavior（社会的行動）, laugh（笑い）, children（幼児）

問　題

生まれた直後の新生児の微笑はうとうとまどろんでいるときに見られる。これは身体の生理状態を反映したものであると考えられるため、生理的（もしくは自発的）微笑とよばれる。その後、生後３週ごろになると人の声に対して、また４週ごろには視覚的な刺激に対して微笑が見られるようになる。このときの微笑は、その刺激の内容ではなく、刺激の感覚そのものに対して反応しているようである。それに加えて、生後２、３ヶ月ごろになると、人の顔によく笑うようになる。人に向けた笑いは社会的微笑ともよばれ、笑いかけられた者の笑い返しや、はたらきかけを誘発する（坂上，1999）。乳児は早期から笑いという手段を用いて、他者との相互コミュニケーションを行っているということができる。

生後８ヶ月頃になると、人に向けた笑いは相手を選ぶようになる。親しみのある大人にのみ笑い、見慣れない人に対しては怖れや警戒を示して顔をそむけたり、泣いたりする、いわゆる人見知りが始まる（高橋，1990）。これは、よく知った人への絆の形成の指標とされるが（園田，2001）、次の段階ではこの絆を拠り所として自分の世界を広げていくと考えられている。２歳ごろ子どもが世界を広げ、周囲の子どもにも親しみを感じるようになると、子ども同士の笑いが生じるようになる（友定，1993）。

１歳から２歳にかけての笑いの発達を検討した友定（1985；1992）は、１歳児の段階では、笑いは主に外界をとらえ受けとめることに使用されていたが、２歳児になると、笑いを他者との関係で能動的に使用することができるようになってくると述べている。例えば、１歳児では快や緊張を伴う感覚に対して笑ったり、未知の経験に遭遇して笑ったり、親しい他者と出会って笑ったりするが、これらは外界からの刺激に依存した笑いといえる。それに対し２歳児になると、自ら相手に笑いかけてコミュニケーションを開始したり、促進したりしようとする行動が見られるようになるとされている。

以上の先行研究をまとめると、人に向けた笑いは生後２、３ヶ月ごろに出現し、その後、笑いの相手や笑いの生起する文脈・意図性などに発達的変化が見られるといえる。ただし、これらは子どもの観察事例に基づく考察であり、数量的なデータはほとんど見当たらない。そこで本研究では、比較的数の多い幼児の笑いのデータを収集し、笑いが起きた文脈、笑いを向けた対象、発声の有無

について数量的な分析を行い、乳幼児期における人に向けた笑いの発達について考察を行うことを目的とする。

方　法

対象

埼玉県内の託児所に通う０歳10ヶ月から３歳２ヶ月の乳幼児16名を対象とした。年齢に応じて、11ヶ月齢児群５名（男児２名、女児３名、平均年齢０歳11ヶ月）、２歳児群６名（男児３名、女児３名、平均年齢２歳２ヶ月）、３歳児群５名（男児２名、女児３名、平均年齢３歳０ヶ月）の３群に分けた。なお、この16名はこの託児所に通う乳幼児の全員にあたる。また、この中には11ヶ月齢児群に双子、２歳児群にその双子の兄の３人きょうだいが含まれ、それ以外にきょうだいはいない。

手続き

2006年７月から８月にかけて計12日間の観察を行った。１日１年齢群を観察対象とし、基本的に午前９時から12時を観察時間とした。ただし11ヶ月齢児群については、観察時間中に全員が寝てしまうことがあり、その場合にはその分の時間を延長して観察時間を調整した。１年齢群につき１日３時間の観察を４日間、計12時間行い、この間に観察者が気づくことのできたできるだけ多くの「笑い」を記録した。

観察者は保育補助として託児所内の保育活動に参加しつつ、被験者の見やすい場所に移動しながら観察を行なう参加観察法をとった。なお、この託児所ではすべての乳幼児が共有のスペースで遊んだり、おやつや食事を摂ったりしているので、異なる年齢群同士の関わりも多い。

口角があがった表情をすることを「笑い」と定義し、笑いが現れた場面を１ケースとして記録を行った。例えば、被験者が観察者と目が合い笑う場面では、ニコッと一瞬笑った場合も、長い時間ニコニコしている場合も、時間に関係なく１ケースとした。

それぞれのケースについて、何に向けた笑いか（人または人以外）、人に向けた笑いであった場合はその相手（保育者または観察者または他児（兄弟を含む））、他者からの働きかけの有無、働きかけがあった場合にはそれが笑いを含むものだったかどうか、発声の有無、またその笑いが起きた状況や文脈についての記録を行った。

結　果

11ヶ月齢児群で102ケース、２歳児群で121ケース、３歳児群で138ケースの記録が得られた。記録されたケース数には個人差があり、11ヶ月齢児群で一番笑いが多かったのは10ヶ月の男児39回、少ないのは10ヶ月の女児の４回、２歳児群で多かったのは２歳３ヶ月の男児の35回、少なかったのは１歳４ヶ月の７回、３歳児で多かったのは３歳２ヶ月の女児の43回、少なかったのは２歳９ヶ月の女児で13回あった。

人に向けた笑いの割合について

観察された笑いのうち、人に向けた笑いの割合を図１に示す。11ヶ月齢児群では、人に向けた笑いは人以外に向けた笑いとほぼ同じ割合で見られた。人に向けた笑いの割合は年齢とともに増加し、３歳児ではほとんどの笑いが人に向けられたものであった（$x^2(2)=27.761, p<.001$）。

人以外に向けられた笑いのケースについてみると、11ヶ月齢児では「２歳児と３歳児がみんなで歌を歌っている時に、自分の体を揺らしながら笑う」や「ベビーカーに乗っている時、ベビーカーを押され笑う」など、感覚的な刺激への反応として笑いが生起した。２歳児でも同様に「１人でぐるぐる走りながら笑う」「ビニールプールで遊んでいるときに、上からカラーボールをたくさん入れられて笑う」など、感覚刺激に対する反応としての笑いが多く見られた。一方、３歳児になるとそのような笑いに加え、他児が机に置いてあるものを落として笑う、他児が作っている粘土の汽車を見て笑うなど、他者のしていることを見て笑うよ

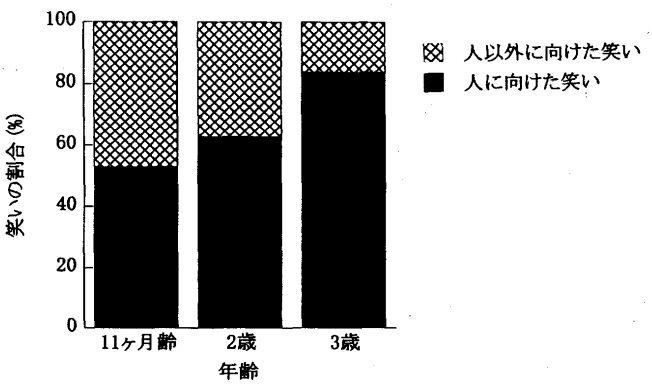

図１　人に向けた笑いの場合

うになる。また、「おやつの前、自分のイスを運び忘れていることに気づき、『あ、忘れた』と言い笑う」などのように、他者の視線を意識した自分の行動に対する笑いが観察された。

人に向けた笑いが生起した文脈について

図２は人に向けた笑いが出たときに、事前に他者からの働きかけがあったかどうかを示す。11ヶ月齢児群では、人に向けられた笑いの６割以上が他者からの働きかけによって引き起こされた笑いであった。２歳児群になると他者からの働きかけによらない自発的な笑いが増加した（$x^2(2)=6.54$, $p<.05$）。さらに、他者からの働きかけがあった場合に、それが笑いかけを含むものであったかどうかを図３に示す。11ヶ月齢児群では58%が笑いを含むものであったのに対し、２歳児群、３歳児群では半数以下に減少した。統計学的に有意ではなかったが、11ヶ月齢児の人に対する笑いは、笑いかけを含む働きかけに対するものであることが多いようだ（$x^2(2)=3.39$, n. s.）。

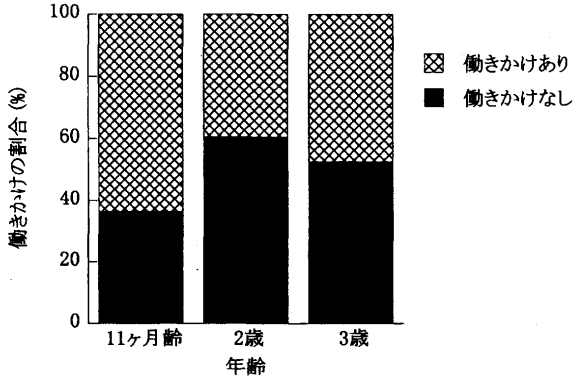

図２　人に向けた笑いが生起したときの他者からの働きかけの有無

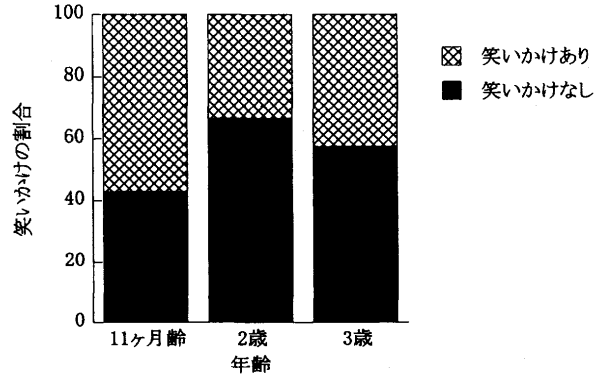

図３　人に向けた笑いが生起したときの他者からの働きかけに笑いかけが含まれる割合

例えば、11ヶ月齢児では「観察者と目が合い、観察者が笑いかけると笑い返す」や「ごはんを食べさせてもらっているとき、保育者に笑いかけられ笑い返す」など、周囲の大人からの笑いを伴う働きかけに対する反応が多い。２歳児や３歳児でも働きかけに対し笑いを返すことも多く見られたが、たとえ働きかけがなくても自分から笑いかけるケースが多くなった。例えば２歳児では、「ビニールプールから観察者に手を振りながら笑う」、「おもちゃの車を保育者に『あげる』と言って渡すときに笑う」や３歳児では「『明日動物園に行くのー』と笑いながらと保育者に話しかける」、「一斉保育でプールに入った日に、観察者に対し、『プール楽しかった？』と笑いながら話しかける」などのケースが挙げられる。

図４には笑いの相手を示す。どの年齢群でも、保育者に向けた笑いと観察者に向けた笑いが多く、他児に向けた笑いは少なかった（$x^2(4)=7.56$, n. s）。保育者に対する笑いの割合が最も高かった11ヶ月齢児では、ご飯を食べさせてもらうなど保育者にしてもらうことが多く、そのときに保育者に笑いかけられ反応として笑うことが多かった。２，３歳児においても、保育者との関わりの中で保育者の働きかけに笑いで反応したり、自発的に笑いかけたりすることは多かったが、忙しい保育者に比べて暇そうな観察者に対して笑いながら働きかけてくることが多く見られた。例えば、2歳児では「絵本のキャラクターを指し、観察者に笑いかける」など観察者に自分の喜びを伝えるための笑いや、「観察者の顔に自分の顔を近づけ笑う」など甘えた笑いが見られた。また、３歳児では「おもちゃをいっぱい持ちすぎて体のバランスを崩したときに近くにいた観察者に向かって笑いかける」というような観察者の視線を意識した照れ笑いなどのケースも見られた。

他児に向けた笑いは多くなかった。子ども同士では、大人が子どもにするような、相手の笑いを誘発するような意図的な働きかけを多くはしないため、相手の働きかけに対する反応としての笑いは少なくなる。それだけでなく、観察者や保育者に対してよく見せる、自分の喜びを伝えるための笑いや、甘えた笑い、相手の視線を意識した笑いなども多くない。観察された他児に対する笑いは、11ヶ月齢児では「昼寝をしている他児を見て笑う」や「他児が体を揺らしているのを見て笑う」

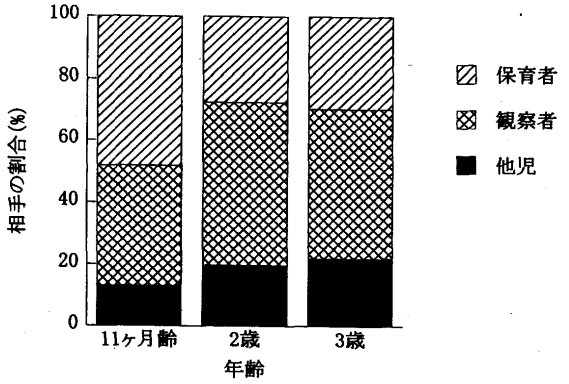

図４　人に向けた笑いの相手

など、２歳児では「他児に犬のぬいぐるみをもらい笑う」や「近づいてきた他児に向けて笑う」など、３歳児では「他児が牛乳を飲み、口の周りに牛乳がついてしまったのを見て『M（他児の名前）ひげじいさんになってる』と言って笑う」や「『今日の紙芝居なんだろうね』と他児に問いかけながら笑う」などであった。

他者からの働きかけに対する笑いの方向について

ここでは、他者から働きかけがあったときに、その働きかけ自体に反応して笑うのか、働きかけた相手に向けて笑い返すのかを調べるために、笑いを含まない働きかけのあったケースについて笑いの方向の分析を行った。図５を見ると、働きかけた相手に向けて笑う割合が11ヶ月齢児群では33%、２歳児群では43%と半数以下であるのに対し、３歳児群では76%と大きく増加した（$x^2(2)=15.77, p<.001$）。

例えば、11ヶ月齢児では、観察者に体を揺らされ笑ったときや、保育者にくすぐられて笑うときは、観察者や保育者に向かって笑うことはほとんどなかった。また、２歳児でも、保育者に頭からたくさんのカラーボールをかけられ笑ったときも、保育者を見て笑うことはなかった。しかし、３歳児になると、保育者がプールを揺らしていると、揺らしている保育者に向かって笑いかけたり、観察者が本を読んであげているとき観察者に向けて笑いかけたりするということが多くみられた。つまり、11ヶ月齢児や２歳児では働きかけに対して笑うのに対し、３歳児では働きかけを喜びつつ、働きかけた相手を見て笑いかけたのである。

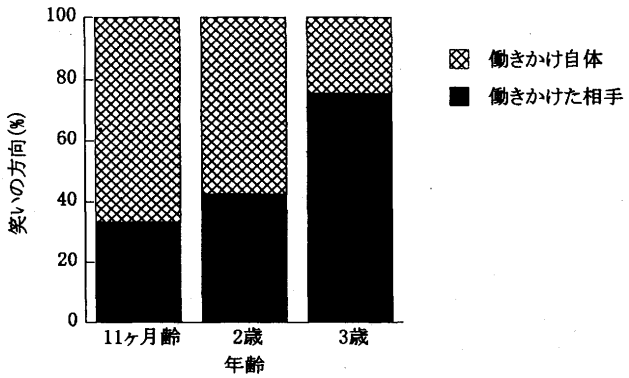

図５　他者からの働きかけに対する笑いの方向

発声の有無について

笑いが発声を伴うものであったか否かを、人に向けた笑いと人以外に向けた笑いについて分析した（図６）。人に向けて笑うときに、11ヶ月齢群ではほとんど声を出さないが、２歳児群ではよく声を出すようになり、３歳児群ではまた声を出さなくなった（$x^2(2)=12.65, p<.05$）。人に向けて笑う場合に比べ、人以外に向けて笑う場合のほうが全体に多く声を出す傾向が見られた。人以外に向けた笑いにおいても11ヶ月齢児群に比べ２歳児群ではよく声を出すようになった。ただし、人に向けた笑いと異なり、３歳児群になって声を出さなくなる傾向ははっきりみられなかった（$x^2(2)=14.93, p<.05$）。

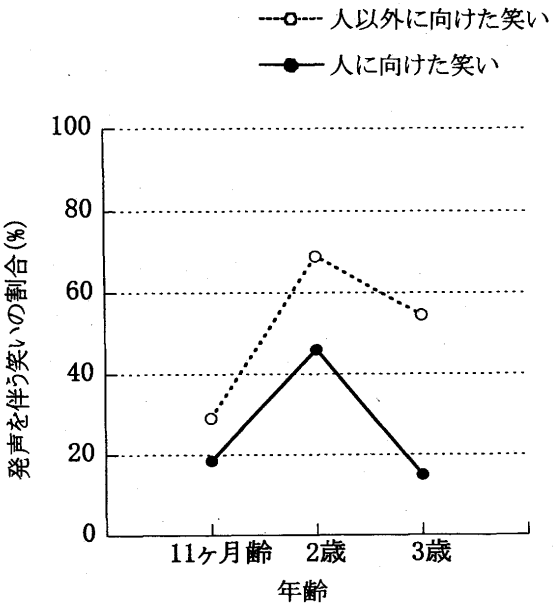

図６　笑いに発声を伴う割合

11ヶ月齢児が働きかけに対してニッコリ笑うのに対し、２歳児は、「１人でぐるぐる走り回りながら、声をあげて笑う」、「ビニールプールから観察者に向けて声をあげ笑いながら手を振る」など、さまざまな場面で元気に声を出して笑った。３歳児もまた遊びの中で元気に声を出して笑うことが多いのだが、人に向けた笑いではあまり声を出さなくなった。例えば、保育者に話しかける場面や、観察者に何かを見せる場面では、声を出さずに相手を見て笑い、相手の反応を確認した。

考　察

11ヶ月齢児の笑い

11ヶ月齢児では人以外に対する笑いが約半数を占めた（図１）。いつもとは違う音や触覚などの外界からの感覚刺激や、自分で何かを動かすなどの運動感覚刺激に反応して笑いが生じることが多かった。このような笑いは、生後３、４週くらいから始まることが知られており、生後の１年間の乳児にとって優勢な笑いのひとつと考えることができる。11ヶ月齢児に人に向けた笑いが生じるのは、多くが他者からの笑いを伴う働きかけがあったときであった（図２，３）。つまり、保育者に何かをしてもらっているときに保育者から笑いかけられ、それに対し笑い返すというパターンである。保育者に向けた笑いが11ヶ月齢群で最も多かった（図４）のは、11ヶ月齢児にもっとも多く働きかけるのが保護者であったからだと考えられる。これらのことは、友定（1992）が、１歳児の段階では笑いは主に外界をとらえ受けとめることに使用されていると述べていたことと一致する。

また、11ヶ月齢児の中には、特定の愛着のある保育者にばかり笑いを向け、観察者の顔を見ると泣いてしまう人見知りの子どももいた。このような愛着の形成期では、愛着対象が笑顔で行う世話や働きかけに対して笑顔で反応するものといえそうだ。乳児期の人に向けた笑いは、保育者や養育者のあたたかい働きかけによって引き出され、育まれていくと考えられよう。ここから、友定（1992）もいうように11ヶ月齢児の笑いは受動的なものであるといえる。ただし、この笑いが保育者や養育者に喜びを与えることによって保護行動を促進する能動的な機能をもつことも確かであろう。

２歳児の笑い

２歳児以降でも感覚刺激に対する笑いは少なくないが、人に向けた笑いが目立つようになった（図１）。２歳児になると、他者からの働きかけがなくても、自分から人に向けてよく笑うようになる（図２，３）。友定（1992）も言うように、２歳児になって笑いを他者との関係で能動的に使用することができるようになるといえる。彼らは、「絵本のキャラクターを指し、観察者に笑いかける」など観察者に自分の喜びを伝えようとしたり、「観察者の顔に自分の顔を近づけ笑う」など甘えようとしたりした。２歳児は笑いを使って能動的に他者に働きかけ、他者の関心を勝ち取り、他者とのコミュニケーションを楽しもうとし始めるのである。また２歳児は、保育者だけでなく観察者や他児に向けても多く笑ようになる（図４）。愛着対象だけでなく、それ以外の大人や周囲の他児にも親しみを感じるようになるため、積極的に笑いかけ、コミュニケーションのチャンネルを開こうとする（友定，1993）。このような子どもの側からの笑いを伴う主体的な働きかけが、彼らの世界を広げていくものと考えられる。

また、２歳児では、11ヶ月齢児ではあまりみられなかった発声が笑いに多く伴うようになる（図６）。これは、人に向けた笑いのときも人以外に向けた笑いのときも同様であった。自分で体を動かしながら声を出して笑ったり、観察者に対して声を出して笑いかけたりした。バラエティー番組を見たときの笑いを調べた成人の研究から、一人のときや見知らぬ他者といるときに比べ、友人と一緒にいるときに笑いに発声が伴うことが多いことが知られている（岡島，2005）。このことは、笑いに伴う発声は、内的状態の反映というよりも、社会的なものであることを示唆している。すなわち、親しい人に自分の感情を伝える目的でなされるコミュニケーション行為であると考えられる。発声という点から見ても、11ヶ月齢から２歳になるまでの間に、笑いは内的な快状態を表すだけにとどまらず、コミュニケーションの促進を目的とした道具としての機能を持つようになるということができよう。

３歳児の笑い

３歳児の笑いはほとんどが人に向けられ（図１）、人に対する指向性は２歳児以上に高まるように見

受けられる。３歳児で特に興味深かったのは、他者からの働きかけがあったときの笑いの方向についての結果であった。11ヶ月齢児や２歳児は、他者から楽しい働きかけがあった場合に、相手を見ずに笑いを生起させることが多かった。それに対し、３歳児になると70%以上が相手の顔を見て笑い返したのである（図５）。その理由が自分の喜びを相手に伝達するためだけなら、２歳児と同じように笑いに発声を伴わせればよい。しかし、３歳児では人に対する笑いに発声が伴わせることは少なくなり（図６）、相手を見るという手段を用いるようになる。３歳児がわざわざ相手を見るのは、自分の喜びを伝えるためだけでなく、それを受けた相手の様子を確認したいからではないだろうか。自分が入っていたビニールプールを先生に揺らされ、揺らしている先生に笑いかけると、その笑いを受けた先生は多くの場合笑い返すだろう。３歳児はこのとき、自分の喜びと相手の喜びが一致しているかどうかを確認しているのではないだろうか。つまり、２歳児が発声によって自分の喜びを表現して伝えることが重要なのに対し、３歳児は自分の喜びを相手が受け止め、自分の感情に共感してくれるかどうかがより重要になってくるのかもしれない。

大人からの働きかけがなくても、自分の喜びに共感してもらうために、彼らの方から先生や観察者に「見てー」と働きかけたり、「楽しかった？」と観察者に問いかけたりしてくる子どももいた。自分の喜びの感情に相手が共感してくれるのかを繰り返し試すことによって、自分の存在価値を確かめているかのようである。逆に自分が何か失敗したときにも、他者の視線を意識した照れ笑いが見られた。この場合は相手に共感して笑ってもらうことで自分の価値を下げないようにしているのかもしれない。３歳児の相手の共感を引き出すための笑いは、このような形で自己意識の形成と関わっているものと考えられる（柏木，1983；友定，1993）。

まとめ

11ヶ月齢児の人に向けた笑いは、特定の愛着対象からの働きかけに受動的に反応したものが多く、内的な快状態の表出である。２歳児になると人に対して発声を伴う能動的な笑いが現れ、さまざまな他者とのコミュニケーションのチャンネルを開く機能を持つようになる。３歳児になると、相手の共感を引き出すことを目的としたような笑いが現れる。

付　記

本論文は、平成18年度昭和女子大学人間社会学部に提出された卒業論文を加筆修正したものである。観察にご協力頂きました託児所の先生方と子どもたちに心よりお礼申し上げます。

引用文献

柏木惠子（1983）. 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会.

岡島由利（2005）. 他者存在が感情の表出と主観的経験に与える影響―バラエティー番組に対する面白さを指標として― 平成16年度昭和女子大学文学部心理学科卒業論文.

坂上裕子（1999）. 豊かな内的世界―情緒の発達（繁多進編著「乳幼児心理学－子どもがわかるすきに
なる－」所収）福村出版.

園田菜摘（2001）. 乳幼児期の親子関係（無藤隆著「発達心理学」所収）ミネルヴァ書房.

高橋道子（1990）. 乳児の認知と社会化（無藤隆・高橋惠子・田島信元編「発達心理学入門Ⅰ乳児・幼児・児童」所収）東京大学出版会.

友定啓子（1985）. 参加観察法による幼児期の「笑い」の発達的研究（第１報） 山口大学教育学部研究論叢、35, 9-18.

友定啓子（1992）. 乳幼児における笑いの発達－1歳児から2歳児へ－. 日本家政学会誌, 43, 735-43.

友定啓子（1993）. 幼児の笑いと発達 勁草書房.

（おんだ　まゆみ　中央グリーン開発株式会社）
（まつざわ　まさこ　生活機構研究科）